澪標

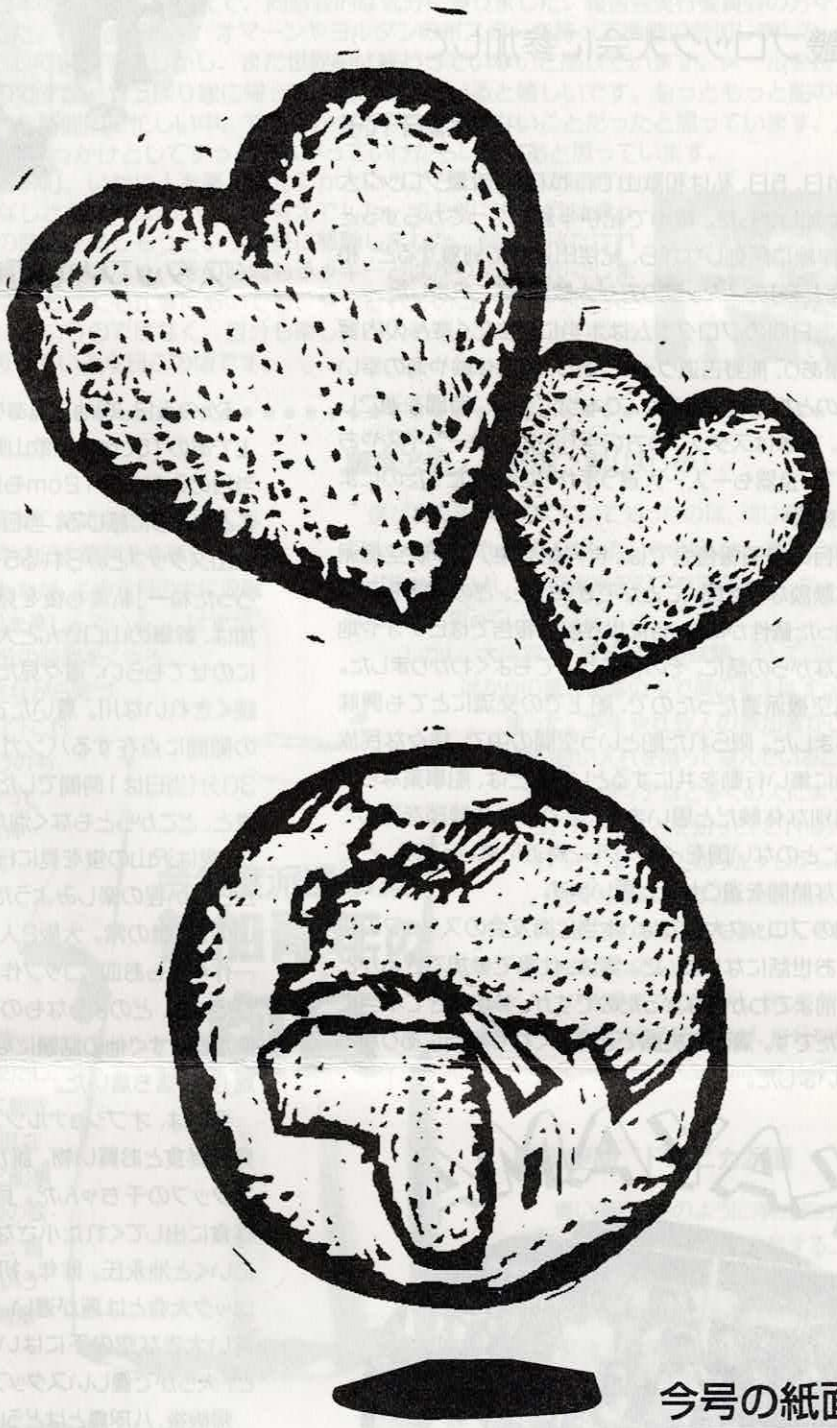
Miotsukushi

1998年8月12日発行

No. 69

MIOTSUKUSHI

大阪府青年国際交流機構
会長　松本　仁孝



今号の紙面

近畿ブロック大会報告
第10回世界青年の船帰国報告会
今年度派遣事業参加者の抱負
リレーメッセージ③

自然の素晴しさを満喫したよ！

近畿ブロック海外派遣 青年のつどい -和歌山大会-

近畿ブロック大会に参加して

宇瀧千代子

7月4日、5日、私は和歌山で行われた「近畿ブロック大会」に参加しました。電車で紀伊半島に入ってからずっと続く海岸線に感動しながら、紀伊田辺駅に到着すると、和歌山「海友会」のスタッフの方が大歓迎してくれました。

この二日間のプログラムは本当に盛りだくさんの内容で、温泉あり、熊野古道ウォークあり、陶芸体験や海の幸いっぱいのとれとれ市場あり、で本当に楽しい時間を過ごしました。食事はスタッフの方の手作りのカレーライスやおむすびで、食器も一人一人違う手作りの陶器だったのにまたまた感激!

二日目の帰国報告会では、世界船や東ア船、航空機派遣の体験談などを聞くことができました。どの報告もそれぞれ違った個性があり、特に世界船の報告ではビデオや地図を見ながらの話に、その様子がとてもよくわかりました。私は航空機派遣だったので、船上での交流にとても興味を持ちました。限られた船という空間の中で、様々な民族が一つに集い行動を共にするということは、船事業ならではの特別な体験だと思います。それらの体験談を通して行ったことのない国をイメージし、身近に感じられる、とても貴重な時間を過ごせたと思います。

今回のブロック大会では、本当に海友会のスタッフの皆さんにお世話になりました。実は、仕事で参加できるかどうか直前までわからなかったのですが、参加できて本当に良かったです。満面の笑顔で迎えてくれて本当にありがとうございました。

スタッフとして参加して

実行委員　木下昌恵

「次の土日、現地下見あります。」驚いた。下見とは、地図上であの15cmの和歌山県の、下から3cm中辺路町まで、当日のみならず12cmも南下することだ。とても大変なことのように感じる。当日紀伊田辺の改札口をでると、和歌山スタッフとみられる5～6人の方が振り向き、「あーそろったねー」私達も後を見た。誰もいない。そう、下見参加は、幹事の山口さんと大阪の2人だけ。遠いもんね。車にのせてもらい、道々見たものは、広い青空、どこまでも続くきれいな川。着いた古道ケ丘は、山の緑と空の青空の隙間に点在するバンガロー。昼食を芝生の上でとり、30分(当日は1時間でしたね。)の古道ハイク。広い渡瀬温泉と、どこからともなく泡が上る川湯温泉(温かい)をまわり、夜は沢山の蛍を見に行った。それは、下見か観光かわからない程の楽しみようだった。しかし、それだけではないのが、世の常。大阪2人組に用意されていたのは、カレー作りでもお皿、コップ作りでもなく、スタッフTシャツ作りだった。どのようなものを作るか彼等にまとまった意向はない。すぐ他の話題になるのを引き戻し、やっと、「八咫鳥」案に落ち着いた。

翌日は、オプショナルツアーの「白浜とれとれ市場」の下見兼昼食とお買い物。誰かが貝をからかって遊んでいる。スタッフの千ちゃんだ。貝の暮らしぶりまで知っている。昼食に出してくれた小さな貝は、時々、家の前の海にとりにいくと池永氏。昨年、初めて参加し、感動した奈良のブロック大会とは趣が違い、何か賦に落ちない私だったが、青い大きな空の下にはいつも山か川か海がある和歌山と、大らかで優しいスタッフが大好きになった。

帰阪後、八咫鳥とはどういう鳥か、Tシャツの色について、やはり2人は悩んだ。やっと出来たカレー色のTシャツは、自画自賛、和歌山スタッフも笑顔で受け入れてくれた。当日は、綿密なスケジュールを元に、2度までも楽しませていただいた。最後は、スタッフとの別れが淋しく、「絶対また会おうね!」と固く約束した私達。実行委員をさせていただいて良かったです。ありがとうございました。

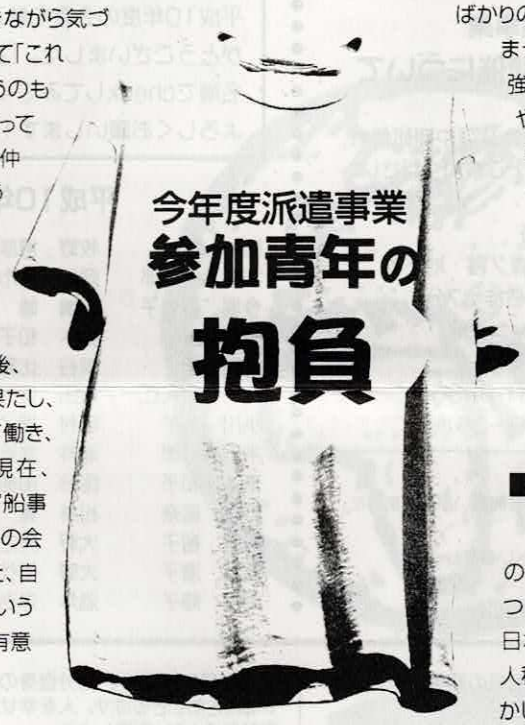
第10回世界青年の船 帰国報告会に参加して

吉川由里子

6月28日（日）、東京オリンピック記念センター（NYC）にて、『第10回世界青年の船』の帰国報告会があり、それに参加してきました。12:00開場、16:30閉場で、ビデオによる船の一日や活動報告やパネルディスカッション、懇談会と盛りだくさんでした。関西メンバーとしては、「関西そりゃそりゃ隊の軌跡」と題して、関西和太鼓チーム結成から下船までの様子を模造紙にまとめて、ロビーに展示しました。久しぶりに日本の参加青年に会えて、同窓会的な気分に浸りました。報告会実行委員会の方々、前日から泊り込みで準備した方々、ご苦労様でした。私は当日の朝、オマーンやヨルダンのポスターを持って準備に参加しました。

もう船が終わって4ヶ月が経とうとしています。しかし、まだ世界船は終わっていないと感じています。メールを持っていないので、エアメールを書いて送っているのですが、やっぱり家に帰って手紙が届いていると嬉しいです。もっともっと船の中で話せていたらという後悔もあるけれど、限られた時間内に忙しい中、できなかったのは仕方のないことだったと思っています。人生の中であの2ヶ月はほんの一瞬のことで、それをきっかけとしてずっとつながっていけたらいいなあと思っています。

船で私が学んだことは、『サービス精神』、いかに人を楽しませるかということです。例えば何かを発表するとします。私はそれをこなしさえすればいいという考えでした。でも船ではそれは違っていて、見る立場に立って一緒にその時間を楽しもうという姿勢に感動しました。例えば待たされている時、文句を言いながら時間を待つのではなく、その時間もラッキーとばかりに楽しんでしまおうというプラス思考など。日常生活においても仕事においても、やらされている、義務的なことって結構多いので、ただこなせばよいというのではなく、自分も楽しく、人も楽しませるという生き方ができればいいなあとつくづく思っている今日この頃です。



■東ア船　俵　今日子

私は、この度第25回東南アジア青年の船に参加させて頂く事になった俵今日子と申します。大阪外国語大学の日本語科を卒業し、大阪のロイヤルホテルに4年間勤めておりましたが、この六月の末に退職致しました。今は久し振りの人生の休日を楽しんでいる･･･はずが、事前研修に参加し、とてもものんびりと自分の時間をくつろいでいる場合ではないという事に遅まきながら気づかされました。最近では目にするもの全て「これは日本紹介に使えないかな？」「こういうのも面白いかも」の繰り返しです。参加が決まってから、様々な人と出会いこの様に素敵な仲間に加えて頂ける事をとても幸せに思う毎日です。

■東ア船　安藤美奈子

まずは私の経歴から…専門学校卒業後、証券会社に就職し、念願の米国留学を果たし、大学卒業後現地でホームヘルパーとして働き、帰国してそろそろ2年が経つという現在、ODA関連の職場で働いています。東ア船事前研修を終え感じたことは、「自分が各国の会得したいことを定め、追及していかないと、自分が流れに飲み込まれてしまいそう」ということです。せっかく得た機会を最大級に有意義に使おうと考えています。

■航空機　デンマーク派遣　桑野哲治

今回、総務庁国際交流事業でデンマークに派遣されることになった関西外国語大学大学院の桑野哲治です。大学院では社会学を研究しており、福祉制度と平等主義で有名なデンマークの社会に大変興味をもっております。現地ではさまざまな活動を通して、今年のテーマである環境問題やデンマーク独特な社会制度を勉強してきたいと思っております。

■東ア船　森岡　創（はじめ）

僕がこの青年の船について知ったのは、同じ職場（税関）の先輩が何人か参加していたからだった。その時には、普通の英語の研修とさほど変わらないし、船で東南アジアを回ると言ったって、遊びのようなものだと思っていた。

しかし、大阪府や、総務庁での試験、そしてつい最近終わったばかりの事前研修の中で僕の考えはすっかり変わってしまった。学生や社会人の参加者がこの船にとても強い思い入れを持って望んでいることや、既参加者やボランティアなど多くの人によって活動が支えられていることを知って、これは大変なものに関わってしまったと思った。しかし同時に、こんな（色々な意味で）すごい参加者と2ヶ月間を一緒に過ごすのはとても楽しい、そして貴重な経験だと思っている。

出発までの2ヶ月、そして船に乗ってからも色々大変だと思うが、自分なりに精一杯やって、悔いのないように楽しんでこようと思う。

■航空機　ドミニカ派遣　高井理香

青い海に、星のように浮かぶカリブの島々。その中にドミニカ共和国は存在する。そこで私が見つけたいものは、人の心のあたたかさです。ほぼ日本の裏側に位置する小さな島で暮らす人々は、人種・文化・生活様式・歴史など何もかもが違う。しかし、それはあくまで自分が描くイメージであって、実際のドミニカ人ではない。自分の五感、いや第六感をも駆使して、ドミニカ共和国に生きる人々と心と心でふれあい、お互いの距離を縮めていきたい。

今回のテーマである「地球環境と青年」。言葉は互いにつたなくても、必ず一緒にできることは見つかるはずです。解決へのステップを共に歩むために、出会った全ての人々に誠実に向き合い、相手を知ると同時に、日本人の私の存在も知って欲しいと強く願っています。

リレーメッセージ3

1963年　第5回日本青年海外派遣

北欧班　**斎藤壮一**

先号の執筆者、賀元澄子さん（東南アジア1班）とは同期派遣であり、日頃から大阪青友会のメンバーとは何かとご縁があり、特に古くから交遊のある酒井洋幸氏からの依頼とくれば「ノー」と言えない事情からペンをとりました。

確かに月日が経つ早さを実感する昨今ですが、我々が派遣された1963年は池田勇人内閣が「寛容と忍耐」をスローガンに、所得倍増・高度経済成長政策を推進していた頃で1ドルは勿論360円の時代でした。パスポートも現在のハンディーサイズでなく、外務大臣太平正芳の直筆サインのある黒皮表紙手帳サイズの重々しいものでした。翌年に東京オリンピックを控えた華々しさの反面、ケネディ米大統領暗殺という暗いニュースもありました。

いずれにせよ、外国にそう簡単に行けない時代の海外派遣でしたので、正式団員に選ばれた者の喜びは相当なものでしたが、その一方では国費で行くからには事前研修の徹底と帰国後の事後活動が約束され、それなりの決意と覚悟が必要でした。北海道出身の酪農経営家の平野氏は、北欧の酪農の実情を熱心に視察し、帰国後講演と執筆に追われながらも、酪農技術の交流に止まらず、訪問諸国の青少年交流の窓口となり活躍しております。その他、町会議員、警察官、税務署員、保母さん、教師など多士採々のメンバーでしたが、BSやGS,何らかの青少年活動経験者であったことが、その後の活動を支えていると思われます。私は現在、京都のはずれに住みながら、大阪市内の私学で教鞭をとっていますが、授業や課外活動で自分の体験談を交えながら、一人でも多くの生徒が将来国又は自治体の海外派遣事業に参加するように働きかけています。またここ数年、我が校を訪れるオーストラリアの中高生を受け入れてくれる家庭が増えていることも喜ばしい限りです。

ホームステイも組織で受け入れる場合と個人レベルでの受け入れがありますが、永年にわたり小金井市でホームステイの窓口となって活躍している関口氏（1963東南アジア1班団員）は「たった一人でも始められる国際交流」の文章の中で、「国際交流は自分の家庭や近所の人々の理解、自分の持っている時間とお金でやっていけるという市民レベルの出発が基本」と述べています。つまり、真の国際理解は短時間ではなく継続する国際交流から生まれ、国籍やジェンダー（性差）を乗り越えての人と人の永いお付き合いにあると思う次第です。

INFORMATION BOARD

平成10年度総務庁海外派遣事業
参加者壮行会および中間研修の開催について

IYEO近畿ブロックでは、各府県合同の壮行会及び中間研修会を、開催いたします。各事業毎お誘い合わせの上ご参加ください。

日時：平成10年8月28日（金）午後7～9時
場所：大阪府立青少年会館　3F研修室（JR森ノ宮・地下鉄中央線森ノ宮から徒歩7分）
内容：（1）中間研修　各事業ごとのミーティング等
　　（2）壮行会　　参加者全員で意見交換等
問い合わせ・出欠連絡先：松本仁孝　06-761-0986
（出欠連絡は8/20～25）

【おわびと訂正】

みおつくし68号で実行委員募集の記事中、以下のような間違いがありました。おわび申し上げますとともに訂正させていただきます。

誤「10月24日～29日に行われるアジア太平洋青年招へい事業」→
　正「10月23日～28日…」
誤「12月14日の国際交流フォーラム」→　正「12月12日の…」

平成10年度会費納入のお礼とお願い

平成10年度の会費を納入して下さった方々、どうもありがとうございました。「払ったかな？」という方は、下の名簿でcheckしてみてください。まだでしたら、よろしくお願いします！！

平成10年度　会費納入者

西村　薫	牧野　博彦	木戸　稔子	宇滝　千代子
羽間　善治郎	岡本　光市	鷹影　久義	和田　良知
今堀　寿恵子	高嶋　睦	竹村　芳子	大野　恵美子
金谷　友子	藤本　和子	月岡　大介	田中　康一
重田　勇	瀧谷　比富美	武田　義仁	焼野　嘉津人
岡田　貴代江	増田　健司	藤田　和昭	山西　一平
小川　英子	嶋村　理子	小西　裕美子	東　繁
木下　二郎	酒井　洋幸	赤木　功	瀧　悄
青木　和子	国分　由佳	辻　豊治	児玉　慶典
野田　星奈	松林　寛	三宅　仁美	池田　留美
矢野　智子	大野　秀之	西村　喜継	木下　久子
賀本　澄子	大野　智代	川崎　美智子	圓井　和正
山田　陸子	酒井　洋右	柏　勇次	

青春後記

53回目の原爆記念日がやってきた。

このころにならないと、戦争について考えたり、平和のありがたさを実感することのない日本という国に生まれ育った超のんきな私たち。こんな私たちでも何かできることがあるのだろうか？

まずは、自分の世界をもっと広げてみよう。学校とバイトだけの生活、職場と家の往復だけの生活、考えることといったら、お金のことやファッション、恋人や友人のこと。そこから一歩抜け出そう！もう少し周りのことも見てみよう。自分自身のことを愛せる人は、他人のことを思いやることもできるはず。人を幸せにすることが、自分にとってもどれだけ幸せなことか、実感しよう。

幸せについて考えるとき、宮澤賢治のこの言葉がいつも頭に浮かぶ。

「世界が全体幸せにならないうちは、個人の幸せなどあり得ない」

隣で泣いている人がいるのに、自分だけが「ああ、幸せだ」と心から思えるのだろうか。「隣の人に比べたら自分は幸せ」という「幸せ」と「本当の幸せ」は違うと思う。

被爆国日本の国民として、また、平和を享受している国民として、あらゆる武器はなくすべきという行動を、もっととるべきなのではないだろうか、と自分に問いかけて反省した一日だった。　(OH!NO)